

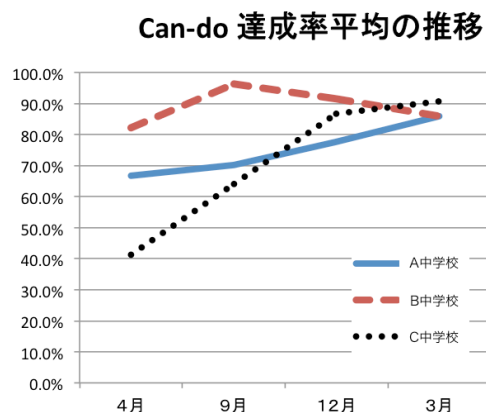
## 中学校入学期における Can-do 調査 -生徒の意識の変容と英語力-

長崎政浩（高知工科大学）

小学校外国語活動の導入(平成 23 年)を受けて、中学校入門期指導の重要性が指摘されてきた。学習指導要領における英語の目標の「聞くこと」「話すこと」の領域において、「慣れ親しむ」文言が削除されたことが示すとおり、小学校において、英語の導入は終えている。スムーズかつ効果的に中学校の指導に接続することが求められることとなった。

高知県内の中高教員の研究グループ（英語授業の幹 & Apple & Freddi Project）は、この問題に対応するため、中学校入門期において Can-Do 調査による入学生の変容を探ってきた。また、その結果に基づく、効果的な入門期指導の在り方も探ってきた。本発表では、その研究結果の一部を報告する。

Can-Do 調査は、英語検定協会が作成した英検 5 級 Can-do List（一部改）を用い、中学 1 年生の 4、9、12、3 月の 4 回実施することとしている。2012 年度は、県内の 1 地域の複数校が共同研究として実施することになり、その推移をみてきたところ、Can-do 達成率の変容に大きな違いがあることが明らかになった(図)。年間を通して達成率が高いが、年度末に向けて下がっていった B 中学校、年間を通してゆるやかに改善した A 中学校、低い達成率から大きな改善をとげた C 中学校。



同一地域のほぼ同等の環境にある中学校であるにもかかわらず、このような違いを示したのはなぜだろうか。また、最終的に 3 中学校の生徒たちの英語力はようになったのだろうか。さらに、Can-do 調査の結果は、私たちに何を語ってくれるのだろうか。このようなリサーチ・クエスチョンをもち、この結果の背後にあるものを探ってみることにした。

そこで、同年度 3 月、3 校の該当生徒に「高知県中学校英語コミュニケーション能力診断テスト」を受験してもらい、テスト及び学習アンケートの結果を得た。また、各校の教員にも簡単な聞き取り調査を行った。

その結果は、平均点に大きな差は生じておらず、ほぼ同等の英語力が身につけているように見えるが、点数の分布や最低得点率には大きな開きがでており、育った英語力のプロフィールに差が出ていることが分かった。また、英語学習に対する意識にも顕著な差が見られ、英語学習を通した身についた意識や態度が Can-do 自己評価に影響を与えていることが示唆された。

当日は、この結果に対する考察を報告し、参加者の皆さんと Can-do List の意義や実施上の留意点などについて意見交換を行いたい。